

A teachable Spirit（教えを受け入れる心）

講演	ケネス・メイナー（けねす・めいなー）
講師紹介	救世軍日本司令官大佐

はじめに

こんにちは。今日はこうして皆さんとご一緒することができて、心から感謝しております。大きな大学、高等教育機関は、どこにおいても三つの基盤となる共通の原則があると思います。第一は創立、「建学の理念」ですね。皆さんの大学の創設者、新島襄は、私の母国アメリカでも大変尊敬されている人物であります。今日はキャンパス内を見学する機会を与えられました。すばらしい先生方が、本当に心を学生の皆さんに注がれているということが分かりました。どの大学にも共通する三つのもの、それは「建学の理念」と「先生」と、そして皆さん、「学生」ですね。皆さんすばらしいお顔をしています。いつも面白いなと思うのですが、私の母国アメリカと、今住んでいる日本では大きな違いがあります。ところが共通のものもあるのです。アメリカの大学と共通のものは、ここで10分前に起こっていたことがアメリカの大学でも起きているということです。アメリカの大学の講義では、ことごとく同じように、まず後ろの方から席が埋まっていきます。その後、入ってきた人からだんだん前の方に座っていくわけですね。そして最後に前の方に座ります。

今日、「教えを受け入れる心」についてお話し申し上げます。世界の救世軍の指導者の中でも、本当にすばらしい人物の一人が、この同志社大学で学びました。その学生について私は、ニューヨークの郊外にある救世軍の士官学校の集中授業で何年も前に学ばせていただきました。その学生とは山室軍平です。全世界の救世軍の歴史の中でも本当に傑出した人物として認識されています。

リーダーとは？

今日の話の土台となる理念、原則をまずお話ししたいと思います。これはソロモン王が書きました旧約聖書の箴言15章32節の言葉です。「論しをなおざりにする者は魂を無視する者。懲らしめに聞き従う人は心を得る」。過去30年にわたって毎年一つのテーマについて、いろいろな本が出版されてまいりました。その一つのテーマのために来年も何千冊もの本が新たに出ることでしょう。私などよりはもっとすばらしい講演者がいろいろなセミナーを開催し、この一つのテーマに対する教えを世界中で行っております。それは何か。「リーダーシップ」についてです。リーダーシップについて異なった理論がありますが、本当にすばらしいものを書く人々が、それぞれの観点から「力強いリーダーとは何か」という本を書いております。リーダーシップとは何かというのは、皆さんそれぞれご自身のお考えがあるでしょう。リーダーに求められる資質は何だろうか。もし私が質問するとしたら「力あるリーダーは何を備えているべきなのだろうか」。皆さん、どう考えますか。「力あるリーダー」を考えた時、まずあなたの心に浮かぶ、求められる資質は何でしょう。どなたでもどうぞ。一つの資質を挙げていただきたいと思います。オーケー。それは「教えを受け入れる心」です。

「力あるリーダー」だと思われる人の姿をよく見ていく時、またリーダーシップについて書かれている本を煮詰めていった時、一つの原則がいつもそこに浮かび上がってくるのですね。それが「教えを受け入れる心」です。これは山室軍平の写真です。救世軍第三代大将であるエバンゼリン・ブースと山室軍平と一緒に写っております（写真①）。これは同志社のキャンパスの中にあるレリーフの写真です（写真②）。これは1907年に東京で撮られた写真です（写真③④）。救世軍の創立者、ウィリアム・ブースの来日に際して撮られたものです。当時の日本の政治指導者たちと一緒に山室軍平が写真に収まっております。そこに彼が入っていたのは、彼が「教えを受け入れる心」をもっていたからです。

彼は農家を営む大変貧しい家庭で生まれました（写真⑤）。お母さんは心血を注いで彼のために祈りました。彼はおじさんのところに養子にもらわれ、質屋の丁稚奉公をしたのです。その頃、彼は「救世軍」なんてことは全く何も知らなかったのです。しかし、学問に努め成長したいという熱い思いをもっていました。そして、頭と心を開いて吸収したいと思っていたのですね。それは彼が「教えを受け入れる心」をもっていたからです。その心のゆえに彼は困難を乗り越えることができました。人生の中で誰も困難がやってきます。しかし「教えを受け入れる心」をもっている人は、いつも思いと心を開いて受け取ろうという姿勢をもっているのです。それによって困難がやってきた時も乗り越えることができるのです。

教えを受け入れる心

山室軍平の生涯を描いた「地の塩山室軍平」という映画があります。これから皆さんにこの映画から引用した動画をお見せいたします。山室は「教えを受け入れる心」をもっていたゆえに、この映画の中に描かれているような困難を乗り越えたのです。これからご覧いただくのは山室が初めて救世軍を訪ねた時のシーンです。

私は、「人生の困難はすべて自分の力になった。当座は気づかないが、歯を食いしばる経験こそ君にとって最上なのだ」という、ウォルト・ディズニーの言葉が好きなのですが、山室軍平は当時の救世軍司令官ライト大佐と先ほどの動画のような出会いをしたわけです。それはあまりよい出会いではありませんでした。この救世軍の司令官がビスケットを食べながら相手をしたので、自分は侮辱されたと言山室軍平は感じたのです。しかし彼は「教えを受け入れる心」をもっていたので、その感情的に抱いていた困難を乗り越えたのです。ウォルト・ディズニーという人は駆け出しの頃、大変惨めな経験をした人でした。彼は破産を何回か経験しております。いろいろな事業のアイデアを試すのですが、その多くは失敗しております。彼はあるアイデアをあるパートナーとニューヨークで試したところ、大成功いたしました。ところがニューヨークから列車に乗ってカリフォルニアに帰る途中、自分のアイデアを他の人に全部売られてしまいました。そのパートナーに裏切られたのですね。しかしその列車の中で彼は絵を描いたのです。この大きな失望の只中で彼はペンを取りました。そして鞆の中から取り出した紙に絵を描き始めたのです。それがミッキー・マウスでした。人生の中で本当に失望させられる経験が、皆さんにも私にもやってきます。しかし、本当のリーダーは「教えを受け入れる心」をもっている。失望の只中にあっても、その失望感を乗り越えていくのです。

第二に、「教えを受け入れる心」をもっていれば、それは知識を増す力になります。山室は、もらった本『軍令及軍律、兵士の巻』（救世軍の兵士（信徒）としての指針の書）を読みました。山室は独学で英語を勉強しました。本当のリーダーは、自分の知識を増していきたいという、本当に消えることのない情熱をもって学び続けていくのです。

同志社のキャンパスの建物はすばらしいですね。生協の本屋さんのところを見ましたけれども、ラーニング・コモンズに行きますと大きな画面にパソコンのモニターが映し出されておりました。今はスマートフォンでGoogle検索をすれば一瞬のうちにいろいろな知識を得られる時代になりました。本当に驚くべき進歩ですね。私が人生で初めてコンピュータを自分で手にしたのは1985年のことでした。私は20世紀生まれで、かなり年をとっております。コンピュータを取り寄せたところ、七つの箱に入って届きました。それを自分の事務所に運び入れたことを昨日のこのように覚えております。箱を開けて解説書を読みながらキーボードを目にしたあの感触、説明書に「どのキーでもいいから押せ」と書いてありました。「Any keyを押せ」と書いてあるので、キーボードを見て「Any keyってどこだろう」と思ったのを覚えております。

「教えを受け入れる心」をもっているならば、人生のあらゆる境遇の中で機会を見つけて学び続けていくことができるのです。エミー・カーマイケルという人のこの言葉が好きです。「霊的な秘訣は神様が説明してくださらないことであっても満足を学ぶことです」。神を愛することを学び、自分自身についての理解を増し、自分の家族についての理解を増し加え、そして今日の世界がどうなっているかという知識を増すのです。

アルバート・アインシュタインの言葉です。「私は出来がよいわけではない。ただ一つの問題を粘り強く考え続けただけだ」。これも「教えを受け入れる心」ですよな。

「教えを受け入れる心」をもっている時に知識を得ていきます。あなたの心、思いの中に、あなたの霊の中に、今、あなたが追いつ求めている質問、問題は何でしょうか。

第三に、「教えを受け入れる心」は人生の転機を悟る力を与えてくれます。誰も人生の中で歴史的転換点がやってきます。地球上では毎日、何百万人の人が自撮りをしています。人々は人生の重要な一瞬を切り取りたいと思っているのです。ところが自分の人生の重大な転機を見逃している人が多いのです。それは自分の思い、自分の心を開閉してしまっているのが気づけないのです。

去年の5月末、私は東京に参りました。そのあとすぐに、こういう質問をされたのです。「あなたは、なぜ日本に来たのですか」。しばらく考えました。その時に自分の中学時代のことを思い出したのです。ある日、ホームルームの先生が「今日、これから新しい取り組みをしましょう。ペンフレンドをつくりましょう。東京の中学生とペンフレンドになりましょう」とおっしゃいました。私は興奮しました。先生が名前を配ってくださって、それぞれ違う生徒の名前が書いてありました。私がもらったのは「田中ゆうた」という名前でした。「ゆうたってどんな人なんだろう」と思いました。その日、私は走って家に帰り、いつもなら放課後は野球をしていましたが、その日はしませんでした。走って帰って鞆を放り投げると、母が紙を入れている引き出しを開けて紙を取り出しました。そして「ゆうた」宛ての長い、長い手紙を書いたのです。自分を紹介する文章を書きました。自分の町のことも書きました。自分のひいきの地域の野球チームのことも書きました。それはクーパーランド・インディアンズです。紙の表も裏も、2枚目も表も裏も書きました。折って封筒に入れて住所を書いて、翌日学校へ持って行きました。先生が封筒を集めておっしゃいました。「大体4週間ぐらいしたらペンフレンドから返事がくるでしょう。東京のペンフレンドです」と。「ゆうた」が何の返事を書いてくれるのか、本当にワクワクと期待して待ちました。待って、待って4週間が経ちました。走って家に帰りました。もう途中で何台か車を抜くほど早く走ったのではないかと思うほど走って、家に駆け込んで郵便箱を開けて、新しい親友「ゆうた」の手紙がそこに入っているはずだ、と思ったのですが、何もありませんでした。翌日、今日こそは来るだろう、東京から手紙が来ているはずだ、「ゆうた」の手紙。走って帰りましたが、今度はそれほど早くは走りませんでした。郵便箱を開けても何もなかったのです。7日間、それを繰り返しました。結局手紙は来ませんでした。私と妻が「あなたたちは、なぜ日本に来たのですか」と質問された時、この話をしたのです。私は「田中ゆうた」を見つけるために来たのです。人生の転機がきた時、「教えを受け入れる心」をもっているならば、その転機がきたことが分かるのです。その瞬間に心を注ぐことができるのです。一歩踏み出して、与えられたまたとない機会をちゃんと掴むことができるのです。

人生の転機をつかむ

もう一つの動画をご覧いただきましょう。これも山室軍平の生涯の映画の1シーンですが、当時の救世軍は日本に来て何をやってもうまくいかないという状況でした。

救世軍は東京で福音を伝えようとしたのです。しかしほとんどうまくいっていませんでした。救世軍は最初横浜に上陸したのですが、救世軍の働きの原則は、その国の文化に適合するとい

うことです。そのため、横浜の港に着いて救世軍の人たちが船から降りる時、日本人の着るような服を着ようと思ったわけです。当時の日本の人たちが着ていた和服を着ようと思ったのですね。ところが日本に来る前に立ち寄った香港で間違ったアドバイスを受けてしまったのです。船から横浜の港に降りた時に救世軍の人たちが着ていた服を見た日本の人たちは、すぐに反応し、笑い始めました。というのは、イギリス人やオーストラリア人の救世軍の士官たちが浴衣を着て降りてきたからです。つまり、寝巻を着て降りてきた。「この外人は、なんで寝巻を着て上陸してきたのだろう」と日本人は思ったわけです。

救世軍の働きは、ロンドンでも路傍伝道から始まりました。当時の日本でも救世軍は東京でまず路傍伝道をしたのです。その様子を山室軍平が遠くの方から眺めているシーンです。これが山室軍平の人生において転機となる瞬間だったのです。この転機を捉えたことで彼の人生はその後、全世界にも影響を与えました。山室は、大変貧しい家庭で生まれ育ち、彼は養子に出されて質屋で奉公していました。家を出ていた彼は「神を愛し、人を愛する」という思いに駆り立てられていました。そして彼は、この外国人が和服を着て変な活動をしているのを遠くから眺めていました。「変なことをやっているな」と思ったけれども、彼は「教えを受け入れる心」をもっていたので、このような光景を全く見たことがなかったにもかかわらず、彼は一步踏み出していったのです。彼が一步踏み出していったことで彼の人生が変えられ、多くの人々を救うために生涯、情熱を傾けて働く人生を生きるようになったのです。当時、日本でも世界でも、多くの人々が貧困線以下の生活をしていました。しかし山室は「こうと決めたら必ずやる」という心をもっていたので、貧しい人々のために、何かをするために一步を踏み出していったのです。

マーチン・ルーサー・キング・ジュニアは、アメリカの歴史の中で大きな混乱の時にあって本当に大きな影響を与えた人物です。彼は教会の牧師でした。当時、アメリカで不正が行われていた状況にあって一步踏み出していった人です。彼は不正に立ち向かう説教をしました。それによってアメリカの社会が変えられたのです。このような言葉を言っています。「人間の本性を計れるのは、絶対で快適な時ではない。困難との闘いの時こそ人間の本性が計られるのだ」と。「教えを受け入れる心」をもっているならば「今、この時だ。今こそ一步踏み出して、声をあげて、社会を変えなければいけない時だ」と分かります。「教えを受け入れる心」をもっているならば「その瞬間が来た」というのが分かるだけではなく、勇気をもって一步を踏み出し、力をもって行い始めていくことができるのです。

山室軍平が立ち上がったことによって、売春に従事させられていた何千人という娼妓が解放され、自由の身となることができました。山室は、東京で外国人が必死で路傍伝道している有様を眺めていましたが、自分がこれから将来、東京で救世軍の結核療養所を開設することを想像もしていませんでした。彼は、やがて自分が全世界のあらゆるところに旅をして、人々に福音を語るようになることを想像もしていませんでした。しかし彼があの時分かったことは、「教えを受け入れる心」をもっていたゆえに、本当に人生の転機の時に彼は一步を踏み出すことができたのです。

さて最後のポイントですが、「教えを受け入れる心」は、成功しても謙遜でいられる力を与えてくれます。私が日本に来て感じたことは、4歳にしても44歳にしても、日本人はみんな「じゃんけんぽん」が好きだなということを発見しました。どこに行っても何をするにしても、何かを決める時に「じゃんけんぽん」をしている光景を目にします。「じゃんけんぽん」をすると勝つ人は1人だけです。ね。「教えを受け入れる心」というのは成功しても謙遜でいるのです。勝つだけではない、それよりももっとよい、もっと大きいことを考えることができるのです。皆さんが同意してくださるなら、ちょっとそれを実験してみたいと思うのですが、大丈夫ですか。よろしいですか。では、立ち上がっていただけますでしょうか。「じゃんけんぽん」は石、紙、ハサミですよ。それと似ているのですが、違うシンボルを使ったゲームをお教えます。第一のシンボルは虎です。手をこのように3、2、1とやったら虎の鳴き声をやってください。2番目のシンボルは人間、男ですね。手をこうやって覆って、3、2、1で「んま」と言ってください。3番目は、これはちょっと難しいですが、やってみましょう。これはロケットのシンボルですが、手をこうやって尖らせて3、2、1で「カパーウ」と言ってください。

このゲームの目的は2人1組になっていただくということです。では2人1組になっていただけますか。相手を見つけてください。このゲームの目的は虎が人間を食うとか、人間がロケットをぶっ壊すとか、ロケットが虎を殺すということではありません。これは人と人がつながる力を体験するゲームです。ではやってみましょう。2人1組になって背中合わせにくっついてください。そして3、2、1と数えましたら顔と顔を見合わせて、「お名前は何と言いますか。初めまして」と言いましょう。次に相手が何を出すかを考えてください。ロケットかな、虎かな、人間かもしれない。3、2、1で同時に向き合って、相手が出すだろうと思うものを自分が想像して出してください。そして2人が合うかどうかを見ます。じゃ、試しにやってみましょう。3、2、1、虎。何人の方が合いましたか。2回目やってみましょう。秘密の合図は出さないでください。3、2、1、「カパーウ」。2人とも合ったという方。私たち2回とも合いましたよ。もう1回最後にやってみましょう。3、2、1。3回とも合ったという方、すばらしい。拍手しましょう。ありがとうございます。どうぞお座りください。

この世で流れている原則は自己責任ということですよ。自分でやらなくては誰も助けてくれないよ、ということです。しかし今、この考え方は破たんしつつあります。というのは、誰も1人では生きられるようにはできていないからです。「教えを受け入れる心」は人を謙遜にします。それは自分を知ることができるからです。自己責任で何でもできるのだという人は自分を過信している人です。それは薄っぺらな考えです。また間違った考え方です。そしてそれは本当の自分を知っていないから、そんな考え方が出てくるのです。自分1人で何でもできるという人は、本当なら手にできるはずのものを自分の人生で全部消し去ってしまっているのです。自分1人で何かができる、それは間違いですね。

次に「自分を治める力」です。「教えを受け入れる心」をもった人は謙遜に生きます。そしてその謙遜な生き方は自分を治める力を与えてくれます。

そして謙遜がもたらす3番目の力は「立ち直れる力」です。山室軍平は東京で、女性を借金のカタに売春宿に売り飛ばすことを政府に法律で禁止させようとして運動を起こしました。借金のカタに売春宿に売り飛ばされた少女たちが自分の自由な意思で売春を止めることができる、そのことを許可する法律を政府につくらせようと彼は運動したのです。

そしてある日、山室軍平は東京の「吉原」という売春区域に行きました。この売春宿の窓越しに売りに出されている少女たちに向かって野外から大きな声で言ったのです。「あなたたちは、もうここで縛りつけられていることはないのです。私たちのところに逃げてきなさい。私たちがあなたたちに場所を提供します」と話しました。売春宿の経営者たちはチンピラを雇って、山室軍平をはじめ、救世軍の者に暴行を働きました。彼、そして一緒に行った救世軍の者たちは、もうほとんど死ぬ直前くらいまでボコボコにされました。売春宿の主人たちは、ボコボコに潰してしまえば彼らは本当に恥をかかなくて、もう二度と救世軍としての活動ができなくなるに違いないと思ったのです。そして自分たちの商売はこれからも安泰だと思っていました。しかし山室は立ち直ったのです。そしてまたそこに行ったのです。「教えを受け入れる心」はまた「立ち直れる力」を与えます。多くの人は困難に直面したら1回で諦めてしまいます。失望させる風が1回吹いてきただけでやめてしまいます。やめてしまうのです。必ず押し返されるでしょう。賢い、頭のよい人たちは諦めてしまいます。というのは、自分の自信に基づいて人生をつくり上げてきたからです。しかし謙遜の人は「自分」を考えに入れていないのです。

C・S・ルイスの『キリスト教の精髓』という本からの言葉です。本当に大切なことが言われていると思います。「高慢な人間は神を知ることができない。高慢な人間はあらゆる事物と人間を見下す。いつも下ばかり見ていれば自分の上にあるものを見られないのは当然である」。山室は「教えを受け入れる心」をもっていました。彼は神を愛していたので、そのような心を養い、もつことができたのです。そして人を愛し、人に仕えました。だからこそ彼は力を受けて最初の反対がやってきても、へこたれなかったのです。

『人生を導く5つの目的―自分らしく生きるための40章』という本を書いたリック・ウォレンの言葉です。「本当の謙遜は自分を卑下して考えることではない。自分について考えることを少なくすることだ」。皆さん、すばらしい大学で勉強しておられます。すばらしい先生方がいらっしゃる。すばらしい設備が整っています。今日、そしてあなたがどういふふうに進んでいくかは、あなたが「教えを受け入れる心」をもっているかで決まってきます。「教えを受け入れる心」をもっていなかったら、人生の中であなたが選択したことは今日の事柄にしかインパクトをもたないでしょう。70歳、80歳、90歳まで生きられたとしても私たちがもっているインパクトは、ほんのわずかなものでしょう。80歳、90歳、100歳まで生きたと仮定して、あなたの人生の選択は、あなたが死んでそれで終わりというものではありません。選択の積み重ねは石を積み重ねるようなものです。あなたの人生というのは、テープのようなものです。あなたが選択すると、その選択は周りの人に影響を及ぼします。家族に影響を及ぼします。そしてやがてはあなたの子どもや孫にも影響が及んでいくのです。あなたが「教えを受け入れる心」をもって選択するならば、そして人生の転機が来たことを悟ることができたならば、そして知識を増し加えることができれば、謙遜に生きることができれば、そして困難に打ち勝つことができるならば、あなたの人生は祝福されるでしょう。最後まで聞いてくださってありがとうございました。

2017年11月1日 同志社スピリット・ウィーク秋学期
今出川校地「講演」記録

この記録は、英語による講演を救世軍山谷真少佐が通訳されたものです。

- 写真① エバンゼリン・ブースと山室軍平
- 写真② クラーク記念館2階に掲げられている山室軍平のレリーフ
- 写真③ 前から2列目左端
- 写真④ 最前列左
- 写真⑤

※写真の表示はホームページでは省略します。